

私は「教育」からこう考える

ここに教育についての一つの意見を提示したい。
きみはここから何を考えるか。自分の意見を引き出してみよう。

まず、なぜ勉強するかについてお話しします。

勉強は時間とエネルギー、注意力、集中力を使って、情報を将来生きるために自分の体の中に変換しているんです。今は情報化時代で、情報は膨大に図書館やネットワークなどさまざまのところにありますが、本当に大切なのは自分の頭の中にどれだけの情報があるか。自分の頭の中になければ情報のあるところへ取りにいかないといいませんが、それには時間がかかります。もともと頭の中に情報がある人にはかきませんね。だから、基本的なことを正確に、頭の中に入れて自分のものにし

ておくことが大切なのです。それが普通教育なんです。たとえば「四面楚歌」を学校で習いますよね。分かなければ辞書を引けばいいというのでは意味がなくて、使い方や意味が自分の頭の中に入っていないのは意味があるのです。だから、高校までは誰もが頭の中に入れないといけないものを学ぶのです。入れないと損をしますよ。入れても得はしないけど、入れないと損をします。

入れて得をするのは自分だけの特別メニューです。みんなが勉強しないことを、自分で勉強しておけば得をします。それも大事。損をしないで得をすれば

幸せになります。人と違うことによってみんな得をしているのですから、世の中助け合いです。みんな違うことをやっているから社会が成り立っているんですよ。自分の得意を伸ばすのは競争ではありません。みんなが幸せになる方法論なんです。

ただ今の教育は、それがなくなってしまう。高校時代が終わり、それから先みんな違うことをやる段階になって逆に自分の方向を見失い、切り替えができないで困ることが多いのです。そうならないためには、普段から人と違うことにプライドを持つことが大切です。自分は友だちと違ったところがいく

つあるか教えてみる。もしなければ、自分独自の勉強や経験から作ればいい。なんでも、やろうとする気持ちが大切です。

学ぶためには人間がどうやって生きていくのかの一生のイメージが大切です。イメージがわけば、学ぶ目的や内容が見えてくるからです。でも、どうやって生きて死んだのかは一生を完結した人にしか語れませんから、結論から逆算して人生を生きていくのは不可能です。だからこそ、自分の将来を最大限想像してみるのです。30歳になった私を想像して、できれば対話を試みるのです。想像上の私と対話ができるようになれば、家

族と関係が作りやすくなります。周囲にいるおじいさん、おばさん、いとこがもう一人の自分で、自分に代わってもうひとつの人生を生きてくれています。その姿からいろいろな情報を得て、

自分のこととして考えることができます。ただ経験は、経験した範囲でしかないため非常に狭いし浅い。それを補うのが学校教育で、学校で教えてくれる質問は実は、経験を時間的・空間

的に広げてくれるのです。学校の勉強は、自分の経験とつながらないからつまらないというのが中学生・高校生の考え方もありませんが、実は大つながりなんです。そう思った方が得。

そして早くわかった方が得です。早くわかれば目標ができるし、学ぶ意欲も生まれます。あなたが今学んでいることには、全て大きな意味があり、あなたの将来につながるものなのです。

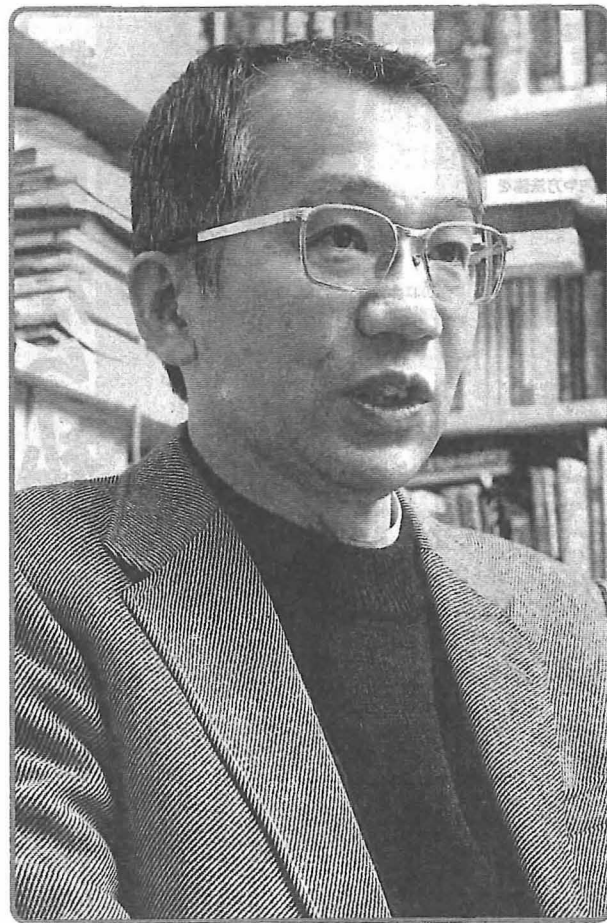
橋爪大三郎

「はしつめだいたいさぶろう」

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。東京大学大学院社会科学研究科博士課程修了。「選択・責任・連帯の教育改革」(完全版)「動草書房」『言語派社会学の原理』(洋泉社)、「心」はあるのか―シリーズ・人間学①(筑摩書房)、『永遠の吉本隆明』(洋泉社)など、編・著書多数。教育問題から政治、経済、国際問題にいたるまで、さまざまな分野にわたる見解を発信している。

テーマ学習

「考える人」の意見を聞く



「考えの履歴書」

親から「自分だけが理由もなく特別扱いをされるのは間違いだ」ということを教わったことが、私の教育を考える原点です。実際に通った公立の小中学校にはさまざまな家庭環境の人がいました。みんなが違うことが当たり前と感じられました。今は社会的な背景が同じになっている分、人と違うことが苦しい世の中になっていますよね。また「パラサイト・シングル」のように自分で努力をしないでも、何でも与えられる世の中になっていますね。学校にいますとみんながやるのだったら自分もやる、みんなが食べるのだったら自分も食べなければなりません。これが「自分だけが理由もなく特別扱いされるのは間違いだ」ということです。道徳性の基本です。これを身につけるのも学校教育です。この基本を身につけたうえで、つぎに、自分だけのオリジナルなことをやっていく。この順番がとても大切なんです。これが逆になると、単なる「わがまま」が育つだけです。

*「パラサイト・シングル」…学業を終え、場合によっては就職してからも親と同居し、経済的に依存している未婚の成人のこと。(『イミダス』より)

橋爪大三郎

（東京工業大学教授）

『言語／性／権力』

橋爪大三郎 社会学論集



——この本に収められた13の論文（序章を除く）は、執筆・発表時期が1984年から最近まで、長期にわたっています。

■93年の『橋爪大三郎コレクションⅠⅢ』（勁草書房）以降に発表したものが中心ですが、アカデミックな雑誌や講座シリーズに書いた論文などは、こうした形でまとめたものなかなか多くの人目に触れる機会がありません。そのため、ある程度、専門知識を持った読者対象にしたものも含まれています。

——「言語」「権力」といった概念を追及した論文もあれば、「イエ社会論」や天皇制など個別のテーマを扱ったものもあり、関心の幅がとても広い。それに、学術的な硬いものから、柔らかいタッチのものまで、いろいろな文体で書いていますね。

人間の行為を見つめた「言語派社会学」の20年

■「社会をいかに自己了解するか」を示すのが社会学の使命です。日本の学者は、よく「それは私の専門ではない」という言い方をしますが、これは誠実な態度ともいえるけれど「逃げ」ともいえる。学問の専門分化が進んだのは、解決を容易に導くためですが、あまり進むと抜け落ちる場所も出てきます。「とにかく問題

仕方はどう変えてもかまわないというのが私の考えです。発表媒体や読者層に合わせるのは当然ですが、それぞれに「ストライクゾーン」があると思うんです。そのど真ん中に投げればかりではつまらないので、いろいろ意識してギリギリのところを狙っています。

——政治や哲学はもちろんでしょうが、経済や法律などさまざまな分野に考察の対象が広がっています。

■「できるだけ単純な原理で、なるべく多くのことが説明できる」生産性の高いアイデアを見つけるのが、社会学の理論では大切です。今はどうしてもデータが多すぎるために理論化が難しいのですが、そこで議論の抽象度を高めようと私は考えました。私の「言語派社会学」を支える言語、性、権力といった概念も、そうした発想から導いたものです。

（聞き手＝大井浩一・毎日新聞学芸部）



春秋社
2625円
説明できる」

若者支援のシステムを

東京工業大学教授 社会学 橋爪大三郎



これで十分だろうか。まったく十分ではない。

教育は、ひとつのシステムである。小中学校も、高校も、大学も、単独で存在しているわけではない。組み合わさったひとつのシステムとして、新しい世代の人びとを、社会のメンバーとして送り出し、時代を再生産している。この教育システムが、全体としてうまく機能しなければ、改革が成功したとは言えないのだ。

いまの教育システムは、うまく機能していない。学校教育を受ければ受けるほど、ますます多くの若者が元気がなくなり、将来に希望が持てなくなっている。教育は、「若者を不幸にするシステム」になっ

が、教育改革でなければならぬ。いまの教育制度は、半世紀も前のものだ。当時は、農村人口が過半数を占め、高校に進学して給与生活者となるのはごく一部だった。受験（進学者の選別）も制度の一部だったが、人びとに公正に教育の機会を分配するには仕方がないことだと考えられた。要するに若者は、戦後の教育システムに、希望を見いだすことができた。

た。多くの若者が、十分な学力のつかないまま、社会に出ている。これは人権問題だ。いまの教育システムの問題は、社会がこのように激変した結果、制度が賞味期限切れになっているのに、それを放置している点にある。若者がふたたび教育システムを信頼し、希望をもてるような、職業選択と人生設計を支援するものに急いで改造しなければならぬ。

昨年十一月の総選挙は、「マニフェスト選挙」といわれ、各党が教育についても政権公約を掲げた。どの政党の公約も、落第点である。いまの教育システムの問題点がわかっていない。政治家諸氏にはもっと勉強してもらいたい。

改革のポイントは、第一に、高校卒業の学力保証の制度を設けること。高検（高等学校学力検定試験）を第三者機関が実施して、これに合格することを高卒資格とする。第二に高校、大学の入学試験を廃止して、それにかわる入学システムを導入すること。第三に、学習指導要領を廃止して、公立学校を公設民営のやり方に改めることである。詳しくは、堤清二・橋爪大三郎編『選択・責任・連帯の教育改革 完全版』（勁草書房）をみてもらいたい。

国立大学が独立行政法人に移行する。教育基本法の改正が日程にのぼった。小中学校でも、高校でも、大学でも、いろいろな改革が実行に移されている。



橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう）

1948年神奈川県に生まれる。東京大学文学部社会科学卒業、同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。社会学者。理論社会学、現代社会論、宗教社会学などを専門分野とする。現在、東京工业大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。主な著書に「言語ゲームと社会理論：「仏教の言説戦略」」「はじめての構造主義」「言語派社会学の原理」「永遠の言本論明：など。

わが秘なる東京

なふうに見えるのかつてところまでは想像してなかつた。たとえばクラスで、勉強ができない子っているじゃないですか。それから友達が少ない子っているじゃないですか。私も一時のだけれど、そういう立場になつた。そういう子が毎日学校へ行くのがどれほど苦しいか、つていうことを、実感として考えてみるようになった。私はといへ、少しずつそういう状況を脱していきました。でも、そういうふうにはいかない子もいるわけですね。こりやあ学校で、大変なところなんだと思ひました。

——そのあたりの観察眼はさすがですね。

選ばれて、クラスでいちばん授業についていけない子を教えることになった。そこで、「じゃあまず自分の名ついで、平がなはほとんど書けることがわかった。でも漢字は、あまり書けない。その日彼が書いたものを先生に見せたら「ぼんとに本人が書いたの?」とびっくりしていました。彼のことはなぜか忘れられない。

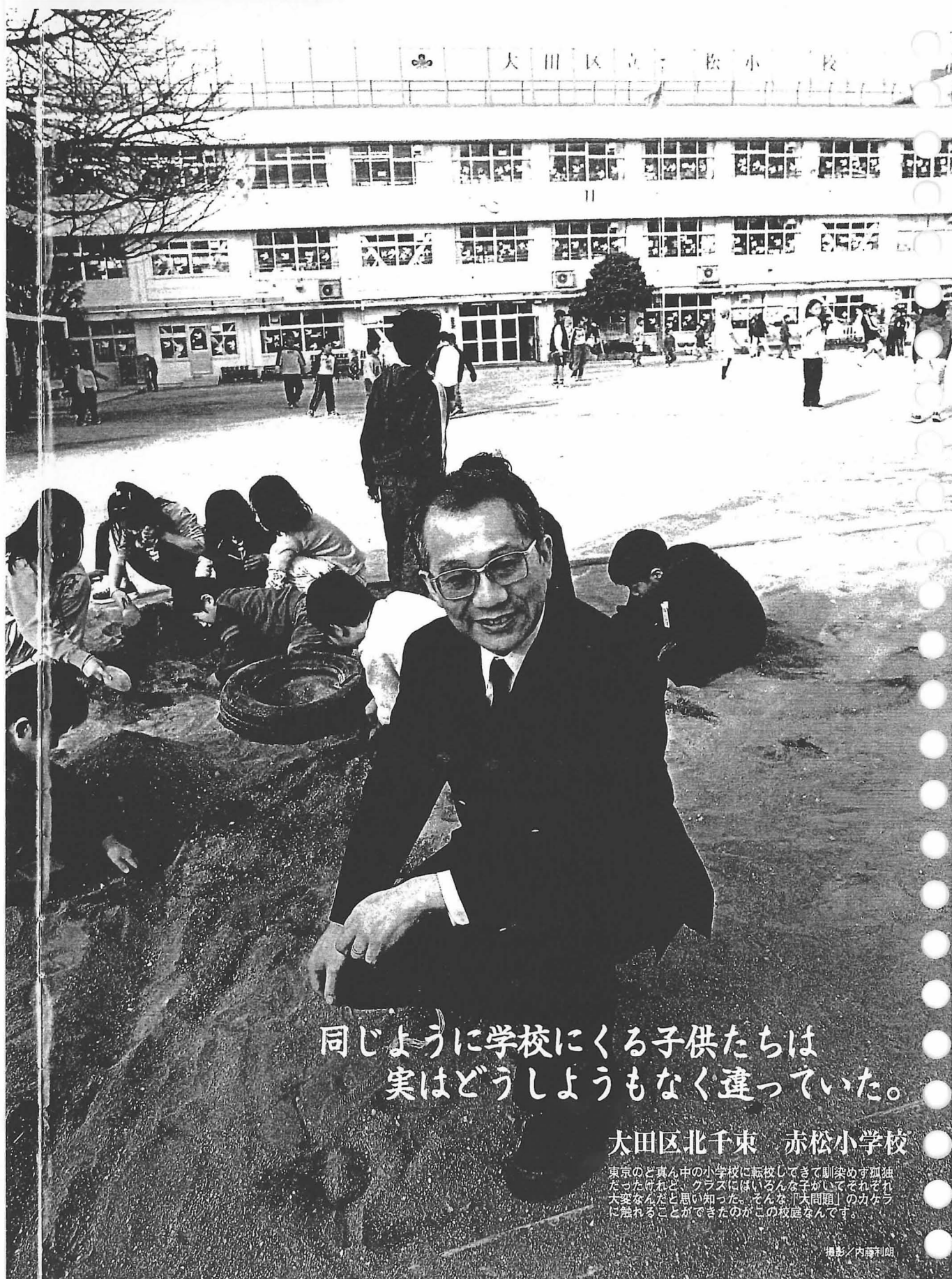
その子が学校に来なくなったので、数人で迎えに行ったこともありました。質素な木造アパートのいちばん上り。いつの意察に彼の勉強机がありました。

転校生はいわば、幕下付け出しから始まるんです。最初の日に「遊ばない？」と声をかけてくる子供は、あとから考えると問題のある子が多い。でも、せつかく声をかけてくれたんだから、遊ばないわけにはいかない。で、砂場で遊んでいると、いつのまにか私たちだけになってしまつて、いひのかなあと思つたけれど、授業はとくに始まつてしまつていて、案の定、担任の先生に怒られてました。級友にもさげすまれる。それが初日です。そこから始まつたんです。その後しばらくは遊ぶ友達もなく、校庭の砂場は見るのも嫌な場所でした。クラスにいろんな子がいることぐらいは知つていたけれど、そのそれぞれの立場から見たら、世界がどん

当時の担任の先生はお芝居が大好きで、学芸会に先生は大張り切りで、「ユリシヅメ」を小学四年生に芝居でやらせちゃうんですから、メチャクチャですよ。舞台がひとつ目の巨人とかになって、先生がひとつ出てきて、目を潰されて「イタタタ」とか軋びて回るんです。私はその他大勢で、トロイの兵隊かなんかやってのいた。変わった先生でしたけれど、私のことともある程度、配慮はしてくれたんですね。たまに試験があつて、私ができたらずにはない。「いまのテストで満点だった子は立ちなさい」なんです言う。何人かと一緒にモソモソ立ちあがると、級友がちょっと私を見直したような感じになるんです。そういううチャンスをわざわざ先生がつくってくれた。

した。参考書や地球儀なんかもそろっているんです。家の掃除も行き届いている。ほんとに普通の家庭で子供を大事にしている、愛情もいっぱいいて、期待もしている、というのがわかりました。だけどその子はわがかりが悪い。いろんな事情で、普通学級に入っているけれど、授業についていけないんです。さみしい顔をしたおとなしい子だった。私は勝手に、家庭環境もよくないんじゃないかと想像していたのだけれど、まるで違ってびっくりしました。そして親はずいぶん悲しいだろうなと思いましたが、そのころもう一クラスに、体力はあつて勉強はできないけれど、もう少し授業について行ける子がいました。その子が、彼のことをいじめたんです。でもその子は、そ

砂場で写真撮影をしていると、六年生とおぼしき一人の少女がやってきて尋ねた。「何してのんですか？」「写真を撮ってもらっているんだけど、ここの卒業生なんだよ。」するとその少女は明るいまなざしで、さつと手を差し延べ握手を求めた。橘岡先生が応じると、ペコリと頭を下げた。そして去って行った。その一瞬のときどきとがあまりに見事すぎて、オールドボーイも思わずニッコリ。同窓の縁何か通じるものがあつたのだらう。



同じように学校にくる子供たちは
実はどうしようもなく違っていた。

大田区北千束 赤松小学校

東京のど真ん中の小学校に転校してきて馴染めず孤独
たったけれど、クラスにはいるんな子がいてそれぞれ
大変なんだと思い知った。そんな「大問題」の力ネラ
に触れることができたのがこの校庭なんです。

外務省

▶サイトマップ

トップページ 各国・地域情勢 報道発表・演説 首脳・外相会談 分野別外交政策 ODA
渡航関連情報 外務省案内 キッズ外務省 ご意見・ご感想 リンクページ 検索
トップページ > 各国・地域情勢 > 中東

中東

| アジア | 北米 | 中南米 | 欧州(NIS諸国を含む) | 大洋州 | 中東 | アフリカ |



小林サマーワ事務所長インタビュー(ラジオNIKKEI「アジアTODAY」)

5月25日(火)19時30分から放送されたラジオNIKKEI「アジアTODAY」(『アジアレポート』コーナー)に外務省サマーワ連絡事務所小林所長が出演しました。インタビュー内容は以下のとおりです。インタビュアーは東京工業大学大学院の橋爪大三郎教授です。

●:小林所長
○:橋爪教授

アジアレポート(タイトルコール)

○このコーナーではアジア各地の様子をお伝えしてまいります。今回は外務省サマーワ連絡事務所長小林弘裕さんと国際電話をつないでお送りします。小林さん聞こえますか？

●はい聞こえます。サマーワ事務所長の小林です。

○橋爪です。宜しくお願い申し上げます。

●宜しくお願いします。

○いま現地は季節的にはどんな感じなんですか？

●夏がまさに始まろうとしているところでして、最近も気温が40度後半になった日もあります。だいたい毎日40度以上の気温が続いています。

○夜もですか？

●日が暮れると涼ぎやすくなって、夕涼みをするには丁度良いくらいにはなります。

○イラク全土がそんな感じなんですか？ サマーワがそうなんですか？

●イラク全土がだいたこういう状況だと思います。もちろん南の方に行くと若干暑くなるとは思いますし、真夏では50度を超える日が多いようです。

○それはご苦労様です。イラクについて日本国民は関心があると思うのですが、なかなかフレッシュな情報が入って来ないので、お分かりになる範囲でいろいろとお教え願いたいと思います。そちらでは自由に歩いたりできる状況なんですか？

●サマーワに限って言えば、他の地域に比べて比較的安全で治安は良好のようですが、それでも我々が行動する時は自衛隊の列に加わったり、あるいは事務所の防弾車に乗って行動しております。

○仕事でサマーワ市内や近郊などに出かけることもあるのでしょうか？

●はいございます。なるべく事前に安全を確認した上で、先程申し上げたような形で行きますし、常に防弾チョッキを着用しヘルメットをかぶって行動しております。

○サマーワの住民と接触する機会はありますか？

●街に出たり地方に行ったりした時は、住民の皆さんと話し合ったり、意見を聞いたりすることはございます。

○サマーワやイラクの皆さんの日本人や自衛隊に対する態度はどうですか？

●自衛隊の活動はここでは非常に感謝されておりますので、どこに行っても日本人は大歓迎で、我々も地元の皆さんといつも歓談しております。

○特に自衛隊のどういう活動が評価されているのでしょうか？

●自衛隊の活動は、水の供給や医療とか、他には道路の補修等を進めているのですが、特に水の供給につきましては、いまちょうど夏に入りかけまして、水が足りなくなってきましたので、本当に皆さん感謝しているようです。

○そうしますと外務省サマーワ事務所というのはどういう役目なんですか？

●様々な活動をしているのですが、主に二つあります。一つは自衛隊の人道復興支援活動が円滑に行えるように外務省の持っている専門知識で支援すること。例えばイラク全般の動向に関する説明や、地元の有力者との付き合い、他には通訳などがあります。もう一つは自衛隊の活動に加えて、外務省としても経済協力を進めていくということです。

○外務省の皆さんの普段の生活はどのような状況なんですか？ 水は十分使用できますか？

●宿営地の中では自衛隊の給水活動の一部を利用したお風呂があり、我々はサマーワ温泉と呼んでいますが、時々水が足りなくなったり、あるいは電気がつかなくなって使用できない場合もあります。

○なるほど水は貴重なんですね。ところで経済協力ということなんですけれども、日本の企業や一般の人々も協力したいと思っていると思うのですが、どういう点への協力が望まれているのでしょうか？

●特にイラクの南部は長い間経済発展から取り残されておまして、おおよそ全ての分野で協力が必要です。まず我々は手始めにいわゆる人道支援ということで、水の供給や医療協力を始めているのですが、文化の面への協力としてサッカーボールの供与も行いました。今後、治安が安定してくれば、発電所等を建設したり、いずれ通信面での協力も必要になってくるでしょう。

○そうしますとインフラ整備ということでしょうか？

●はい。インフラが不十分なので、これから長い時間をかけて整備していく必要があると思います。

○一つ心配な点は、せっかく良かった治安がもし悪くなるようなことがあると経済協力もなかなか進めにくいと思うのですが。新聞などによりますと、シーア派の中にもアメリカに反対して過激な路線を打ち出しているグループもあるとのことですが、サマーワの状況はどうでしょうか？

●サマーワの人たちは非常に平和を愛好しておまして、アメリカの支配に反対する一派がサマーワに入ってくると、これを止めたり、みんなで説得して攻撃をやめさせたりしています。それでも時々銃撃事件がおきていますので、今後はどういう状況になるのか見極めていく必要があると思います。

○サマーワにはオランダの部隊も駐留していますね。サマーワ事務所の皆さんはオランダ部隊との接触はあるのでしょうか？

●非常に頻繁に接触しております。彼らはこの辺りの治安の維持をイラク警察と共同して担当しておりますので、毎日様々な情報を交換しています。また、オランダ部隊の一部は人道支援もやっておりますので、そのための協力・調整業務もしております。

○協力関係は上手く進んでいるということですね。

●はい、非常に上手くいっております。

○小林所長の個人的な体験などもお話を聞きたいと思うのですが。小林所長はサマーワに行かれてどれくらい経ちますか？

●4月の中頃に来ましたので、約1ヶ月の滞在になります。

○これまでも中東には何回もいらしていますか？

●はい。わたくしは外務省に入ってからアラビア語を専門にしましたので、中東地域での勤務経験はありますし、現在はエジプトの日本大使館からサマーワに派遣されております。

○中東や他のアラブ諸国と比べて、サマーワやイラクでは何か違った感じを受けますか？それとも共通点が多いのでしょうか？

●もちろんアラビア語であるとかイスラム教であるとか、アラブの一般的な風習には共通するものがあります。ただ、イラク人全般に非常に優秀な人が多いという感じを受けますし、川もあり国土も肥沃なのでこれから発展の可能性は非常に大きなものがあると感じております。

○自衛隊の隊長さんが髭を生やしていて、現地にとけ込んでいるというような報道があったのですが、サマーワ事務所の皆さんもやはり髭を生やしているのでしょうか？

●サマーワ事務所員でも髭を生やしている者がおります。私も以前は髭を生やしていたことがあります。

○お仕事以外で、息抜きとか余暇はどうしていますか？

●毎日、夜遅くまで打合せをしていますので、息抜きする暇はあまりないんです。それでも最近になって自衛隊の運動施設ができましたので、ときどき利用させてもらっています。休日の夜などはDVDで映画を観ております。

○こ最近は何を観ましたか？

●「レッド・ドラゴン」を観ました。

○お隣のサウジアラビアではアルコールが禁止されていますが、イラクではどうでしょうか？

●イラクではアルコールを飲もうと思えば飲めると思います。ただ、宿营地の中では飲まないことにしております。

○飲みたいと思う時はありますか？

●ありますけれど、サマーワで勤務している期間は我慢したいと思っております。

○いまこれが食べたいと思う物がありますか？

●ここの食堂は非常に美味しいのですが、やはり生ものが少ないので、お寿司とか新鮮なお魚類が食べたいと思います。

○そちらでは主にどんな物を食べているのですか？

●和食が中心です。日替わりメニューで色々な物が出てきます。非常に良く考えられたメニューだと思います。

○一般の日本人には「イラクは危険」というイメージがあると思うのですが、イラクに赴任するに際してご家族や友人・知人の皆さんから心配されませんでしたか？

●非常に心配されました。しかし、ここではE-mailが通じますので、ほぼ毎日連絡を取り合っていますし、衛星電話も通じますので週に数回、家族や実家に連絡しております。

○最後に、小林所長のお立場で日本の皆さんに何かメッセージがございましたらお願いしたいのですが。

●日本から見ますと中東方面は非常に縁遠いような印象があると思いますが、地理的にはヨーロッパやアメリカよりずっと近いんです。それから今や中東地域は日本にとって非常に重要な地域になっておりますので、最初から理解し難い地域と敬遠されずに、世界の中でどこにでもある普通の場所という理解の上で、もう少し中東のことを身近に接してもらうような機会をつくってもらえればありがたいと思っています。

○本当にそうですね。私も関心を深めていきたいと思っています。大変に厳しいお仕事だと思いますけれど、どうぞお気を付けて無事に任務を全うされますように。

●ありがとうございます。頑張りたいと思います。

○どうもありがとうございました。

●はい、ありがとうございます。失礼いたします。

○失礼いたします。今回は外務省サマーワ事務所長小林弘裕さんと国際電話をつないでお話を伺いました。

小泉首相の再訪朝に対して、橋爪 大三郎・

東京工業大学教授は、『論座』2004年7月号「国交正常化を目的にしてはならない」で「外交的、政治的に成功しなかった」と断じている。小泉首相が家族の帰国を優先させたことについて、(1) 家族の帰国を待望する世論にこたえ、政権の浮揚をはかる(2) 国交正常化交渉の「障害」を取り除く—の2つの理由をあげ、国交正常化は日本の国益になるのか、と疑問を投げかける。「国交正常化とは、要するに、北朝鮮への経済支援である」とする氏は、日本にとって重要課題ではないと断言する。国交正常化は「手段ではあっても、目標であってはならない」とし、核や拉致問題を解決するためにちらつかせるのはいいが、「北朝鮮のような核をもつ独裁国家に、日本への好意など期待すべきでない」「核をもつ独裁国家の存在自体が脅威である」とする。今後の外交立て直しについて、(1) 北朝鮮が核廃棄に応じないかぎり、国交正常化はありえないとはっきり態度を固める(2) 問題の10名をはじめ、拉致ではないかと疑われている安否不明者全員について、徹底解明を要求する(3) 世論の支持のもと、北朝鮮を制裁できるような法律を国会で成立させる—の3点を求め、さらに、アメリカと緊密に連携して核廃棄と脅威の除去を最大の目標として外交を進めるよう主張する。

In “Diplomatic Normalization Should Not Be the Goal,” Tokyo Institute of Technology Professor Daisaburo Hashizume says that Prime Minister Jun’ichiro Koizumi’s second visit to North Korea “succeeded neither diplomatically nor politically.” Hashizume gives the following two reasons for why Koizumi put priority on returning to Japan with the family members of Japanese who had been abducted by North Korea: (1) He thought that responding to public opinion would give his administration a lift, and (2) doing so was a way of removing an obstacle to the normalization of diplomatic ties. Hashizume expresses doubts, however, as to whether normalization is in Japan’s national interest. “Normalizing diplomatic relations essentially means giving economic assistance to North Korea,” he states, dismissing the matter as one that is not important to Japan. He argues that normalization “can be a means, but it cannot be an end,” saying that while it may be acceptable to dangle the possibility of normalization to resolve the nuclear issue and abduction problem, “Japan should not count on the goodwill of a nuclear-armed dictatorship like North Korea. . . . The existence of a nuclear-armed dictatorship is itself a threat.”

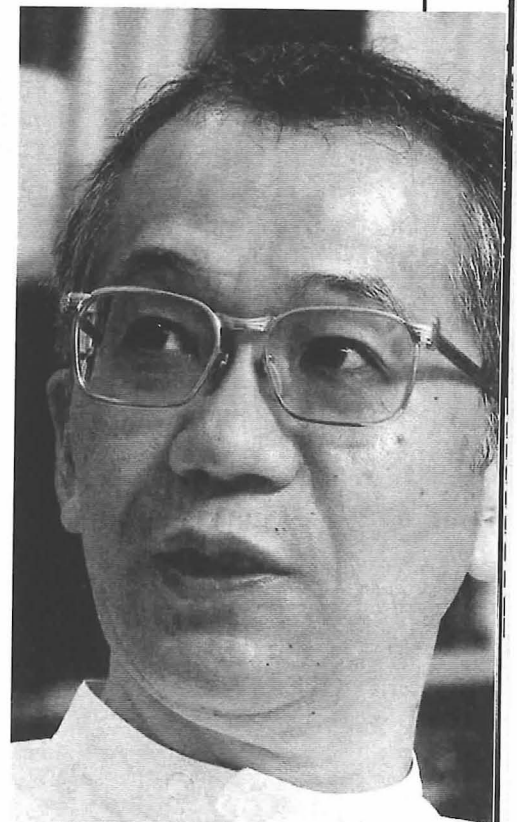
Hashizume gives the following three suggestions for refashioning Japan’s North Korea policy. (1) Japan should take the stern stance that there can be no normalization unless Pyongyang abandons its nuclear program. (2) Japan should demand a thorough and complete investigation of the fate of all suspected abductees, including the 10 at issue. (3) With the support of public opinion, legislation allowing Japan to place sanctions on North Korea should be enacted by the Diet. Hashizume goes on to say that the foremost goal of Japan’s foreign policy should be to work closely with the United States toward eliminating North Korea’s nuclear program and removing the threat it poses. (“Kokko seijoka o moku-teki ni shite wa naranai,” Ronza, July 2004.)

THE VOICE

誌上激論!

2004

番外編



橋爪大三郎 (はしづめ・だいぼろう)
1948年神奈川県生まれ。72年東京大学文学部社会科学科卒業。77年同大学大学院社会学研究科博士課程修了。89年東京工業大学工学部助教授を経て、95年教授に。96年から現職 (大学院社会理工学研究科価値システム専攻・教授)。最近の著書としては『政治の教室』『その先の日本国へ』『人間にとって法とは何か』『永遠の吉本隆明』『言語/性/権力』など。

写真/高坂敬夫

今月のテーマ 参院選を斬る

参院選が終わった。「自民敗北、民主躍進」「2大政党化強まる」というのが、大方のマスコミ評だが、実情はどうだったのか。

社会学者でありながら、ユニークな視点からの政治分析で定評のある橋爪大三郎・東京工業大学教授は、自民党と民主党との痛み分けだったのでは、と指摘する。さらに「今回は中間選挙ということから、ガス抜きのきまぐれ・お気楽選挙に終わった」との酷評も。

今回は、番外編として橋爪氏に縦横無尽に語ってもらった。

インタビューー 仮野忠男

橋爪大三郎

東京工業大学
大学院教授
社会学

今回、自民党はもつと負けてよかったんです。でもそこまで負け込まなかった理由は①争点となった年金問題が消費税ほど分かりやすくなかった②公明党が頑張った③アナウンス効果が出た④有権者がバランス感覚を発揮した——からだと思います。

理由からです。そもそも参院選は、政権交代につながるものではない。衆院選ほどの意味がないから気まぐれでいられる。だから米国の中間選挙みたいに政権への不満表明に終わったということでしょう。日本流に言えば、ガス抜きです。有権者にはいま「与野党を逆転させよう」というほどの根性はない。衆院選だったら、こんなにホイホイ民主党に投票しませんが。公明党と合わせれば与党圧勝と言ってもいいわけで、民主党の前に立ちかかる壁は大変厚いと言わざるを得ないです。

冒頭で自民党が負け込まなかった理由を4点あげましたが、その背景・真意はこういうことです。まず①の年金と消費税の関係。自民党は1989年、消費税導入の是非が争点となった参院選で大敗北しました。消費税は増税ですね。国民全員からお金を取るというものですから、こんなに分かりやすい話はない。ただ年金というのは、取られる人がいれば、もらう人もいます。再配分ですから。へたに抜本的な改革をやられたら困る人もいます。ですから国民がござって「ノー」と言う構造にはならない。そこが消費税とは違う。そもそも年金というのは分りにくいものなんです。何故かという

今回は中間選挙というところもあり、ガス抜きのきまぐれ・お気楽選挙に終わった

自分がいつ死ぬか分からないからですよ。いつ死ぬか分かれば、年金にまつわる損得というのが明快になってくる。利回りも計算できる。しかし、自分が死ぬ日を知っている人はいない。だから情緒的な反応をしてしまうわけです。

国会議員の年金未加入・未納問題、年金改革法の強行採決などがあり、国民の多くが改革法に反対したからだと言われていますが、これも「こり押ししたところを見ると何か怪しい」ということじゃないですか。だから政策課題として争点になったというより、国会議員の道義的、倫理的な問題、政治姿勢の問題として争点になったということでしょう。

小泉純一郎首相の「人生いろいろ、会社もいろいろ」発言が話題になりました。小泉さんは攻めるのは強いが、守りには弱い。追詰められると苦し紛れにいろんなことを言う。十分に説明できないために、ああいう失言になったんでしょう。

②の公明党の頑張り。キャスティング・ボードを握るようになって以

降、公明党は少数者でありながら、大きな政治力を発揮するようになった。一方の自民党は政権を手離さないですむという大きなメリットのために、地域振興券や児童手当といった中ぐらいのメリットを公明党に与えている。公明党というささやかな政治的勢力が、創価学会員のボランテニアの大頑張りによって、大きな政治的影響力を手に入れることができる。ということで自民、公明両党のどっちにとっても有利な関係になっている。

しかし、これを政治全体で見ると、民意による政権交代を阻止していると言えるわけで、大変な悪影響が出ていると思います。過渡的な形態、望ましくない形態と言わざるを得ないです。

③のアナウンス効果。事前に「民主優勢」という報道が相次いだため、「小泉首相にはあまり賛成ではないが、そこまで追い込むのもなんだな」と自民党支持層が投票に行った。逆に「自民優勢」と事前に報道されていたら無党派層は「民主党に入れよ

う」と投票にもつと出て行き、反対に自民党支持層は投票を手控えたのではないのでしょうか。そうなれば自民党の議席は40台前半で終わっていたかもしれない。

④の有権者のバランス感覚。今回、民主党に投票した人のうち3〜4割はへっぽり腰だったと思いますよ。確信を持って投票した人はあまりいなかったんです。民主党の政権担当能力に関してまだ未知数という思いがあったことでしょう。その意味からも民主党は核心的なサポーターを育てていかなければだめですね。

参院無用論や1院制など、いま参院のあり方が問われています。しかし、今回の選挙を通じてこの点が議論されることはなかった。参院が第2院としてのチェック機能を強めたと思うのなら、第1院(衆院)との機能分担を進めるべきです。立法は衆院にまかせ、参院は国政調査や長期的なポリシー・ペーパー作り、決算や行政に対する監視機能などを強化していくべきでしょう。

仮野忠男の激辛コメント

橋爪氏は自身の著書『政治の教室』(PHP新書)の中で「人々がもつと本質的なところで政治を理解し、それを面白がることのできるようでない」と、この国は良くならない。社会学者の私が、専門外なのに政治について語ろうと思いついた理由はそこにある」と書いている。

今回のインタビューは「専門外」とはいえ、異色の内容となった。その中でも小泉首相と岡田克也民主党代表に対する人物評が面白かった。

まず小泉首相。橋爪氏は「彼は自民党の『外』を用意することで政局を動かしてきた人物だ。『外』とはアメリカや国民世論、公明党などだ。政局運営のためには何でも利用する。金正日まで利用する。古典的技術だが、これに長けている。ただし、最近はこの使い過ぎますね」と評した。

一方の岡田代表。「開票後、岡田さんは笑わないで苦虫を噛み潰したような顔をしていた。政権をとるつもりなのに依然として野党のままなんだから、まだ喜べないということでしょう。当然の態度ですね」と語った。

この2人。今後、政治をどれほど面白くしてくれるのだろうか。今回の参院選は新しいドラマの幕開けを告げるベルの音と考えていいだろう。



仮野忠男 (かの・ただお)
政治ジャーナリスト
(徳島文理大学総合政策学部教授・元毎日新聞論説委員)

国際化

清華大学合同プログラムがスタート

合同プログラム運営委員会委員長
橋爪 大三郎

2004年9月に、清華大学との間で、大学院合同プログラムがスタートしました。合同プログラムとは、清華大学と東京工業大学とが協力して、大学院の教育を行ない、学生に双方の学位を授与するというもの。外国の大学と協力するこのような大学院のプログラムは、わが国では前例のない画期的なものです。合同プログラムの詳細や、その狙いについてご説明します。

まず提携先の、清華大学について紹介しましょう。清華大学は、躍進いちじるしい中国の、理工系大学の最高峰。しかもここ10年のあいだに、経済管理学院、法学院、公共管理学院、人文社会科学学院などを設け、総合大学に变身しつつあります。近い将来、世界でもトップレベルの大学に躍り出ることを目標に、研究と教育に力を入れています。学部大学院の学生は合計で25474人（2002年）。北京市内の西北部に広大なキャンパスを有し、周辺には清華大学系列企業のビルが立ち並んでいます。

東京工業大学は、この清華大学と、1986年に協定を結び、さまざまな交流を深めてきました。そして2002年4月に、学長のもとに国際室を設けたのを機会に、清華大学との交流をいっそう拡大するプランを計画しました。その後、2年間の準備をへてスタートしたのが、今回の合同プログラムです。

このプログラムは、東京工業大学の国際化戦略の一環です。

ここ10年ほどの間に、世界中の大学の国際化、グローバル化が急速に進んでいます。学生の移動や単位の互換、共同研究が盛んになり、競争力のある大学はますます競争力を強め、人材や資源が欧米諸国、特にアメリカの一部の大学に集中する傾向が強まっています。また、英語の地位が飛躍的に高まり、英語抜きに大学の教育や研究は成り立たないまでになっています。国際室は、こうしたグローバル化の潮流が今後ますます強まると予測し、そのなかで東京工業大学が「世界最高の理工系総合大学」となるための戦略を考えました。詳しくは、国際室のポリシ

ーペーパー（2004年2月）をみて下さい。

さて、英語が当たり前になったグローバル社会では、英語に加えてもうひとつの外国語ができることが、大きな強みになります。たとえば、日中の企業や大学が、合併や共同研究の相談をするのに、英語を使っているわけですが、なんと回りくどいことでしょう。中国人の科学者や技術者や企業のトップが日本語が堪能なら、あるいは、同じく日本人の側が中国語を使いこなせれば、効率が高まるし、英語しかできない人びとを尻目に、ビジネスチャンスをつかみ、キーパーソンとして大きな役割を果たすことができるのです。

今回の合同プログラムは21世紀、中国と日本の学術界、産業界をリードする、こうした人材を養成するものです。北京の清華大キャンパスで、東工大の教員が日本語で授業を行ないます。中国人の学生は日本語を、日本人の学生は中国語を学び、英語・日本語・中国語のできる科学者・技術者となって卒業します。

中国と日本では、制度や習慣が違うため、合同プログラムを実現するには工夫が必要でした。たとえば、清華大の修士課程は通常3年なのに対し、東工大は2年です。また、清華大学は9月が新学期ですが、東工大は4月が新学期です。所要単位や学位規定も異なります。双方の学位は、両大学それぞれの学則に基づいて授与されるので、学生の負担を少なくするために、なるべく多くの講義を、両大学が共同で開講することが必要になりました。また在学年限は、清華大の学生が3年間、東工大の学生は2年半となりました。

専門は、ナノテクノロジーコース、バイオコースの2つです。

ナノテクノロジーコースは、東工大の理工学研究科の5専攻（物質科学専攻、材料工学専攻、有機・高分子物質専攻、電気電子工学専攻、電子物理工学専攻）が参加し、清華大からは材料系（材料科学与工程系）が参加します。バイオコースは、東工大の生命理工学研究科の5専攻（分子生命科学専攻、生体システム専攻、生命情報専攻、生物プロセス専攻、生体分子機能工学専攻）が参加し、清華大学からは生物系と化工系が参加します。定員は、各コースとも東工大、清華大から5名ずつ。あわせて毎年20名です。東工大から参加を希望する学生は、これら専攻のどれかを選んで、合同プログラム修士課程の入学試験を受験して下さい。願書受付けは毎年6月中

旬、試験は8月です。清華大から参加を希望する学生は、材料系、化工系、生物系のいずれかに入学してから、合同プログラムに参加します。

2004年9月に入学した清華大の学生は、北京で学んだあと、2006年4月ごろ東工大に移動。研究室に入って論文を完成させ、2007年2月までに東工大の学位審査を終えます。そのあと北京に戻り、研究を続けてもう一編の論文を完成させ、2007年7月までに清華大の学位審査を終えます。以上が、双方の学位を取得して卒業するまでの、標準的なスケジュールです。

東工大の学生は、2005年4月に入学、前期の授業を受けたあと、2005年8月ごろに北京に移動。日本語、中国語の授業を受けて、2006年6月ごろ、東工大に戻ります。そのあとは、清華大の学生と同じスケジュールで、双方の学位を取得します。短期間に別々の二編の修士論文を作成するのは困難なので、研究題目は類似していかまいませんが、まったく同一の論文ではないものとします。

清華大で、日本語で講義を行なうため、教員が常駐します。9月10日に、ナノテクコースの伊澤慎一、宮崎栄三の両特任教授、バイオコースの中條利一郎特任教授、王易特任助教授が、東工大から赴任しました。この4名が一連の講義を行なうほか、随時、そのほかの教員が出張して、集中講義を行ないます。これらの講義は、東工大の正規の講義であり、同時に清華大の正規の講義です。

このほかにも、清華大と東工大は、それぞれ相手大学の講義の単位を認定して、学生が学位要件を満たせるようにします。

合同プログラムに参加する学生は、東工大と清華大の両方の学籍をえて、両方の大学の学生となります。このため、両方の大学の学費を支払うことになります。特に清華大の学生にとって、この学費の負担や、日本への旅費・滞在費の負担が大きいので、それをカバーする独自の奨学金を支給することにします。それにはかなりの財源が必要なので、日中の関連する企業に、資金の援助をあおいでいます。すでに数社から協力の申し出をいただきましたが、今後もっと広い範囲で理解と協力がえられるよう、努力していきます。なお、資金が十分に確保できる見通しがつけば、東工大の学生の負担にも配慮したいと思います。

合同プログラムを運営するために、国際室のもとに運営委員会をおき、さらに、それぞれのコースに

コース会議をおきました。運営委員会や委員の名簿などについて詳しいことは、<http://www.ipo.titech.ac.jp/member/meibo3.html> をごらん下さい。

合同プログラムは、スタートしたばかりですが、さらに拡充をはかるべく活動中です。三番目のコースとして、社会理工学コースを設けることを検討中で、社会理工学研究科にその準備会が発足しました。清華大学側も、2005年9月から試験的にこのコースをスタートさせてはどうかと言っています。

また、修士課程だけではなく、博士課程にも拡大できないか、検討しています。

合同プログラム1年目の入学者は、清華大学がナノテク5名、バイオ6名の計11名。東工大からは、ナノテク1名、バイオ3名が入学を許可されました。

この合同プログラムについて、もっともっとよく知ってもらうため、学生向けの説明会を開くことにしました。11月17日（水）午後1時半から、大岡山南8号館1階101室で開きますので、お集まり下さい。すずかけ台の生命理工学部では、Lゼミの時間に説明します。

中国の最高峰である清華大学の学生となる特権的なチャンスが、東工大の学生には開かれています。この合同プログラムを修了して、高い科学技術の専門的な能力とともに、英語・中国語の能力や清華大学の人脈を手にしたあなたの、未来は無限です。ぜひこのチャンスに、挑戦してみてください。また、教員や関係者、企業の方々の、よりいっそうの理解と協力をお願いします。

問合せ先

企業の寄付

国際室 長池宏哉 ikenagaike@jim.titech.ac.jp

合同プログラム全般

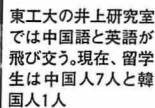
橋爪大三郎 hashizm@valdes.titech.ac.jp

ナノテクコース

岩本光正 iwamoto@pe.titech.ac.jp

バイオコース

井上義夫 yinoue@bio.titech.ac.jp



中国の頭脳にも
日本から熱視線

坂村教授も東工大も提携

清華大とプログラム

「うちの研究室の論文の約6割は留学生が主体になって仕上げたもの。成果を上げようという意識が非常に高い」

東工大は今秋から、北京の清華大学と意欲的な試みを始める。バイオテクノロジーとナノテクノロジーを対象とした両大学院の合同プログラムだ。2コース合わせて20人程度の日中の学生が、両大学を移動しながら学び、論文を書き、両大学院それぞれから修士号

東工大の狙いは、中国の優秀な学生を呼び込む礎を築くことだ。米国の大学が科学技術分野でトップを走り続ける秘訣は、世界中から優秀な頭脳を集めてきたことにあるといわれる。

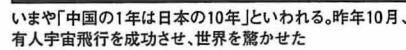
「日本の大学も日本人だけで研究
していく時代ではない」
とナノコース長の岩本光正教授
は言う。

大学もグローバル化の波にさらされる時代。国際競争に勝ち残っていくために、中国の頭脳を積極的に集めたいというわけだ。

清華大との提携で、まずは通訳なしに意思疎通できる技術者の育成を目指す。合同プログラムの責任者、橋爪大三郎教授は期待する。「日中ビジネスのキーパーソンを育成する。卒業生が奪い合いになることは確実」

清華大は朱鎔基前首相、胡錦濤国家主席ら多数のエリートを生み出してきた。欧米科学雑誌への論文掲載数、特許件数、研究委託件数などを評価した中国政府のランキングでトップを走る。

「人口13億の中国で有名大に入るのには日本よりはるかに厳しく、極めて優秀な学生が選ばれる。入学



科学技术予算も大幅増

紺野さんが指導するレーザー分



科学技術を経済発展の原動力と

位置づける中国政府は、予算も大幅に増やしている。同時に競争原動力を導入し、米国式の成果主義を徹底。効率的な研究をめざし、中国科学院傘下の約120の研究所を80に再編中という。

を80に再編中という。

「いい成果は30代が出すという認識で世代交代も進めている」

と英科学誌ネイチャーのデイビッド・シラノスキー記者は指摘する。たとえば中国科学院の生物物

改革開放以降、中国から海外に留学した学生は数十万人とされるが、大半は残って研究を続ける。中国政府は世界の最前線で活躍する人材に対し、重要なポスト、特別な研究資金、自由な研究環境、快適な住宅などを用意して、帰国を奨励してきた。海外に籍を置いたまま、講義や学生の指導を引き受ける研究者も多い。

もちろん、集めようとする人材は国を問わない。日本の「頭脳」も、中国側の意欲の高さを受けて関係を深めている。

関係を深めている。

コンピューターの基本ソフト
(OS)、「トロン」の開発者とし
て知られる。

て知られる坂村健東大教授は今年5月、北京大の特任教授に就任。中国科学院とは共同開発のための

研究室も立ち上げた。家電だけでなく家具や薬などあらゆるものにコンピュータを組み込む技術で世界をリードする坂村さんは中国への技術移転を進め、日本での技術研修も引き受ける。

北京大での講義は立ち見が出る
 人で、大勢の学生が身を乗り出
 して質問した。

「非常に熱心。これからトロンの上に乗るプログラムが中国でどんどん開発されるだろう」

日本発の技術が中国で爆発的に発展する可能性が膨らむ。

中国に研究室の「分室」を作る

例も増えている。
たかはしたち

高橋保北海道大触媒化学研究

センター長は昨年、北京大に拠点を設置。部屋を借りて研究装置を

運びこみ、研究員を雇った。高橋研の元留学生である北京大化学学院の院長と共同研究を進め、成果

の特許は日本で申請する。高橋さんは清華大や石油大とも連携する信頼関係を築いて優秀な学生を紹

介してもらう一方、北大の成果を世界に発信する基地にもなる。

高橋さんは言う。

「形だけの交流で乾杯を繰り返して帰るといふ従来のスタイルはもう意味がない。今後は日中両国の

発展に貢献できる提携の時代」

中国科学院に4月、ナノテク研究室の「分室」を設置したのは大阪大の河田聡教授。河田研の中国人留学生が教授になり、現地で研究員を雇った。ナノテク分野ではまだ中国発のオリジナル研究は目

「日本の環境対策でできることはほとんどやっているが、中国はこれから。ニーズがあるところで学問は進歩する」

中国科学技術大に共同研究室を立ち上げる予定で、香港かシンガポールで研究成果をビジネス化するベンチャー企業を設立することも視野に入れている。